

(様式2)

平成 24 年度

自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1571700192		
法人名	社会福祉法人 ごせん福祉会		
事業所名	グループホーム すもとの里		
所在地	新潟県五泉市論瀬5975番地12		
自己評価作成日	平成24年12月12日	評価結果市町村受理日	

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.jp/15/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社団法人新潟県社会福祉士会		
所在地	新潟県新潟市中央区上所2丁目2番2号 新潟ユニゾンプラザ3階		
訪問調査日	平成25年1月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

このホームは開設してからも長く、利用者の皆様は心身的に安定されて生活されています。『おもてなしの心』で、入所してもご家族との関係が疎遠にならないように努めています。以前の既往歴やご家族からの話を聞いて、服薬も最小限に留め、安定剤や眠剤、下剤も少なくしていけるように日中の生活や食事に工夫しています。暖かい時期には買い物や外出に出かけ、回転すし・ハンバーガー・ランチ等の外食も楽しんでいます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

平成13年に特別養護老人ホームの2階に開所した事業所である。運営母体は長年地域の社会福祉事業に取り組んできた社会福祉法人であり、地域の納涼祭の開催場所として法人の敷地を提供し合同で行うなど地域とのつながりも深い。そうしたつながりを基盤として、運営推進会議や避難訓練等で地域住民からの協力を得ている。

管理者・職員は、利用者や家族の些細な希望や要望を聞き逃さず、次のサービスにつなげていけるよう取り組んでいる。利用者や家族の言葉や表情等から気づいた事柄を積極的に収集するため、苦情に至らないような小さなことについても「苦情ひやりハット」報告を作成し、検討して改善につなげている。また、利用者の生活の様子について毎月家族に手紙を送り、情報共有とともに、利用者と家族との関係維持を支援している。

おいしく楽しい食事の提供にも努め、利用者にとって馴染みのある食材、地元の特産物を使った献立を考えている。彩りの良い、食べやすいおいしい食事が提供されている。

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	<p>理念の共有と実践</p> <p>地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている</p>	<p>法人の理念を基に、地域密着型としての事業所自体の理念を共有し、ミーティングやカンファレンスで個々の適切な殊遇について話し合っている。</p>	<p>法人の理念をもとに、本人、地域、家族と共に寄り添う介護を目指し、より分かりやすい事業所独自の理念を作っている。しかし、職員により理念の捉え方に相違があり、事業所理念の共有という点で十分でない面がある。</p>	<p>理念は、実践の根源となるものであり、また、事業所の強みや取り組みの意義を再確認できるものである。管理者と職員とが共有して実践に取り組むことで、組織としての理念の実現につながる。事業所における共有の仕方についての工夫を検討してほしい。</p>
2	(2)	<p>事業所と地域とのつきあい</p> <p>利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している</p>	<p>地域の芸能祭、納涼祭に利用者共に参加をしている。</p>	<p>地域の芸能祭りや、法人の敷地内で開かれる地域の納涼祭に、利用者と職員と一緒に参加している。事業所の隣には野菜の販売所があり、地域の人との交流の場となっている。近隣住民は協力的であり、運営推進会議等を通して意見を得ている。</p>	
3		<p>事業所の力を活かした地域貢献</p> <p>事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている</p>	<p>勉強会で得た知識を地域の人に対して伝えていく機会もあまりなく、地域での役割の実践・認知症介護の専門性の還元等までには至っていない。今後の課題としたい。</p>		
4	(3)	<p>運営推進会議を活かした取り組み</p> <p>運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている</p>	<p>主に行事内容の報告が主となっているが、職員の処遇や活動内容、防災訓練等の内容に関して積極的な意見交換の場が多かった。内容を職員に伝えている。利用者本人が意見を述べる等事も多々あり、有意義な時間が設けられたと思う。</p>	<p>利用者代表、家族代表、市の介護保険課担当者、地域包括支援センター職員、近隣住民がメンバーとなっている。冬場の利用者の健康管理や災害対策等、具体的な意見交換がなされている。</p>	
5	(4)	<p>市町村との連携</p> <p>市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる</p>	<p>個々の実情に合わせて、権利擁護等の相談をしている。</p>	<p>市の担当者は運営推進会議のメンバーでもあるため、定期的に来訪しており、日頃からコミュニケーションを図りやすい関係が作られている。</p>	
6	(5)	<p>身体拘束をしないケアの実践</p> <p>代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる</p>	<p>左記の様に取り組んでいる。</p>	<p>身体拘束をしないケアを基本としており、平成24年度は法人全体研修会で身体拘束の弊害について基本を学ぶ機会を持った。職員間でも研修の内容を共有している。</p>	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(5-2)	虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	左記の様に取り組んでいる。	法人内の年2回の研修に参加し、法令遵守や認知症の高齢者へのケアについて学んでいる。「苦情ひやりハット」様式を活用しながら、利用者や家族の声を聞き逃さず、虐待防止の徹底に努めている。管理者は職員のストレス状況などの精神面にも配慮している。	
8		権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修会があれば参加をしている。入所者の事情に応じて必要性が感じられてきている。これからの課題としたい。		
9		契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	左記の様に行っている。		
10	(6)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族からの要望は、すぐに職員に伝えている。苦情相談等も今後の処遇に活かせるように努めている。	「苦情ひやりハット委員」を法人内に設置し、利用者や家族の声を聞き逃さないように、積極的に聴取している。寄せられた意見は運営推進会議で報告し検討するなど、改善に努めている。しかし、利用者や家族にその活動や改善行動について周知されていない。	「苦情ひやりハット」報告活用の取り組みが意欲的に行われている。今後は、活動及び改善行動について利用者・家族に周知をすることで、事業所の意欲的な姿勢が伝わり、より一層の意見の引き出しにつながると思われる。さらなる取組みに期待したい。
11	(7)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回、ミーティング・勉強会を通して職員の意見・提案を話し合い、運営に反映させている。	管理者は日頃から職員が意見を言いやすい雰囲気作りを努めており、毎月1回の職員会議でも職員からの意見を聴くようにしている。しかし、会議内容としては連絡事項や情報伝達等が終了してしまうことも多く、意見交換の機会として十分に機能するには至っていない。	日々の業務や会議等では、多忙な事もあり十分に意見聴取の時間がとれない現状がある。職員の意見や提案を聴取する機会を意識的に持つことで、ケア内容や運営の改善に向けた意識の共有にもつながる。さらなる工夫を期待したい。
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人のできる範囲で取り組んでいる。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人以外の研修参加者にはミーティング時に報告してもらい、職員に伝えている。事業所外での必要な研修には、全職員が参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	昨年度より市内のグループホーム連絡会議を2回/年で各ホーム持ち回りにて会議を開催している。管理者のみの制度や運営状況の検討会となっているが、今後職員同士の交流会や事例検討会にも繋げていきたい。		
安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスに相談があったときは、不安や困ったことを聞いている。		
16		初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	これまでのご家族の苦労や経緯についてゆっくりと聞くようにしている。事業所としてどのような対応が可能かを説明している。		
17		初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	主に担当ケアマネジャーから紹介された相談なので、対応できるサービスはほぼ理解されている状態であるが、他事業所の利用が可能だったり、必要であれば柔軟に対応している。		
18		本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入所されてから長くたって居る方が多いので、援助においてはパターン化している面が多いと思われる一方、慣れ親しんでいるので、新しい職員や利用者もすぐになじみやすい。		
19	(7-2)	本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	体調不良時に限らず、良くなったことや細かい出来事を近況報告や面会の時に伝えるようにしている。ご本人の家族への思いを伝え、今後のサービスのあり方を一緒に話している。	家族の面会時には利用者の近況を報告し、また、毎月手紙としても報告するなど、丁寧な情報提供を行っている。こうした取り組みにより、利用者や家族の関係が途切れないようにし、家族にも利用者の希望する活動や支援への協力を働きかけている。	
20	(8)	馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域に暮らす友人が定期的に遊びに来られたりしている。ご家族の他に友人にも年賀状を出したり、理念の内容を踏まえ、関係を切り離さないように努めている。	利用者一人ひとりの馴染みの関係について、家族や知人等から情報収集を行っている。情報はケース記録や連絡ノート等に記載し、職員間で共有している。入居後も馴染みの人との関係が途切れないよう、会える機会は減ってきてても、年賀状を出したり会話の中で話題にするなどしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う利用者同士話をしたり、気兼ねなく過ごせるような環境を作り、よりスムーズな関係を築いていけるような支援に努めている。		
22		関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他の事業所に移っても、ご本人に身体状況の低下がご家族の負担にならないように、面会や情報提供をして心身状況の維持に努めている。		
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の言葉をケースに記録するように心がけている。それを家族に伝えたり、生活の意向に反映できるようにしている。	日々の関わりの中から利用者の思いを把握できるように、利用者一人ひとりの担当職員が中心となって、本人の言葉や生活の場面での様子等をケース記録に記載している。介護計画のモニタリング時には利用者から満足度調査も行っている。	利用者の思いや意向については記載されているが、日々の生活記録の中に埋もれ、確認しにくい状況が見られる。情報把握や情報整理の方法について、検討・工夫を期待したい。
24	(9-2)	これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族の面会時に昔の様子等を聞き、職員間で共有している。	入居時のアセスメントはもちろん、入居後も継続的に本人・家族等からの情報把握に努めている。管理者は、聴取した情報が整理でき、また、実践につなげやすく現在使用している記録様式の改善を検討中である。	記録様式の改善により、把握した情報が共有しやすく、かつ、支援内容の検討や見直しに活用しやすくなることが期待される。
25		暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個々にあわせて、食事・水分・排泄チェックをしている。具合が悪く状態が低下した後にもすぐに、以前のように生活できるように援助している。		
26	(10)	チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	左記の様にしている。	定期には3ヶ月に1度のモニタリングを行い介護計画の見直しにつなげている。モニタリングは担当職員を中心として、他の職員からも情報や意見を得て、また、本人には満足度調査を行うとともに家族には面会時に意向を確認しながら行っている。かかりつけ医にも直接、または家族を通じて意見を聴取し、計画に反映させている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画に沿ってケースに記入をし、カンファレンスで情報を共有し合い、その中で出た意見を基に介護計画の内容の見直しをし、月に一度担当職員がケース記録に評価記入している。		
28		一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	重度化した場合には、特養への申請・入所依頼等をしている。これまでの経緯によっては、看取り対応も行っている。		
29		地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	定期的にカラオケのボランティアが来ている。他事業所開催の『お茶の間サロン』にできるだけ参加している。		
30	(11)	かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族が希望する、かかりつけ医になっている、体調悪化時の受診は家族対応で、利用契約時にその旨を説明し同意を得ているが、本人の状態に応じ柔軟に対応している。	入居後も本人、家族が希望するかかりつけ医への受診を継続できる。受診の付添いは基本的には家族が行うが、困難な場合は職員が支援している。家族や医療機関とは日頃からコミュニケーションを図っており、日々の様子や体調の変化等について情報を共有している。	
31		看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	体調悪化時には同法人の看護師に相談をし、助言を受けている。		
32		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	受診は家族対応であるが、できるだけ細かい情報提供に努め、受診後の不明な点はこちらから聞くようにしている。		
33	(12)	重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	左記の様に行っている。	入居時に、重度化した場合の対応や終末期支援における事業所の方針を説明し、共有している。重度化や終末期の支援については、本人・家族・かかりつけ医等の意向・意見を確認した上で、事業所としてできること・できないことを話し合い、個別に支援のあり方を検討している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34	(12-2)	急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急時の勉強会は行っているものの、実技や実体験がないために、いざというときの不安感を職員は抱いている。実技を交えた勉強会の実施が課題である。	救命救急法の研修等、法人で行う全体研修に参加している。しかし、すべての職員が実技を交えた訓練を体験するまでは至っていない。管理者は現状では不十分と認識し、今後の課題としている。	骨折や窒息等、日常的に起こり得る急変や事故の研修を日頃から行うことが期待される。経験の浅い職員もいるため、何が不安なのかを具体的に挙げ、同法人や他機関の協力を得て、実技訓練を実施するなどではどうか。
35	(13)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	法人全体で地域の青年部・婦人部・消防の協力を得て、定期的に消防訓練を実施している。	事業所が建物の2階にあるというリスクを踏まえ、夜間の火災を想定して避難訓練を実施しており、その際は近隣住民の参加と協力を得ている。また、防災訓練の様子等を掲載した「防災通信」を作成し、地域等への働きかけを行っている。災害時の食料備蓄などの備えは法人全体で管理している。	
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	接遇向上委員会の開催、ボランティア・実習生の受け入れ等、第三者の介入を刺激として、具体的な言葉遣いの改善や、馴れ合いの関係性を見直す機会としている。	排泄介助時等の声のかけ方等は、利用者の尊厳に配慮している。利用者の意見を大切に、また、表情等から職員が推察したことも含め、小さなことも「苦情ひやりハット」報告につなげ、利用者を尊重したケアの実践につなげている。しかし、利用者の下着等の洗濯物が、他の利用者や来訪者に見える状態で干されている状況があった。	下着等の干し方については、生活の場であるので致し方ない場面もあると考えられる。しかし、職員は利用者の権利を代弁する立場であることを再度確認し、生活の中で利用者の誇りやプライバシーを守るとはどういうことなのか、工夫できることは何か等を改めて話し合う機会を設けてはどうか。
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員側の都合の基本的な業務内容が中心になっている。		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	何かと職員のペースになりがちだが、日々の中の本人が発した言葉や行動を理解することで、利用者主体の意識を高めていきたい。		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	外部での理髪にかかっている利用者いないが、本人・家族に髪型の意向を聞いている。本人のお小遣いの中で、職員と一緒に洋服を選んで購入したり、利用者によってはメイク道具を買ったりして身なりを整えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	左記の様に行っている。	ゴマをすったり野菜の皮をむくなどの下ごしらえや、食材の買い出しなど、利用者それぞれが力を発揮している。また、利用者と職員は食材や味の感想などを話題にしながら一緒に食事を楽しんでいる。利用者の慣れ親しんだ地元の食材を意識的に使うとともに、年1度、法人所属の栄養士より栄養面から献立への指導を受けている。	
41		栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	タバコについては希望する方がいないが、お酒を飲みたいと希望する方については、その日の気分で晩酌をしている。		
42		口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後必ず口腔ケアをしている。義歯の方は夜間消毒を行っている。		
43	(16)	排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中はなるべく布パンツで過ごしている。本人にとって快適に日々を過ごしてもらうため、自分でトイレに行けない方には排泄チェックをつけて誘導している。夜間は快適に安眠できるように、ご家族と相談しながら、パット・紙パンツを併用している。	利用者一人ひとりの状況に応じて、必要な方には排泄確認表をもとに排泄の量や間隔を把握し、それに応じた排泄支援を行っている。必要時には尿取りパットやリハビリパンツの使用も検討するが、基本的にはそれらを使用せず、トイレで排泄できるよう支援している。	
44		便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	現在、内服している方はいない。個々の状況に合わせて、牛乳・食品・粉末繊維で調整している。		
45	(17)	入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴する日や時間帯は決まっているが、入浴を拒否する方に関して言葉かけや対応の工夫をして、スムーズに入浴を実施している。	基本的には2日に一度、午前中に入浴としているが、利用者の気持ちやタイミングに合わせた入浴ができるよう状況に合わせた支援をしている。体調不良等により入浴できない日は、足浴や清拭で対応している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の睡眠状態により、個々の日中の活動を支援している。不眠だった方には昼寝を、入眠前に落ち着かない方にはコタツで横になってもらう等、工夫している。		
47		服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	配薬の曜日を決め、当日の日勤者が配薬し、夜勤者が確認をして職員全体に利用者の内服の内容が周知できるようにしている。眠剤・安定剤等、日中の様子を見て減らせるように調整している。		
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	普段の生活の中でも、力が発揮できるように声かけをし、作物の収穫や食事の準備等、一緒に取り組んでいる。外出も行い気分転換をしているが、本人の希望する催し物や外出先を把握することが課題である。		
49	(18)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天候や本人の気分にに応じて、日常的に散歩、買い物に出かけている。	天候や本人の気分にに応じて散歩や食材の買い出し等を楽しめるよう支援している。また、レストランでの外食等も支援している。外出支援の実施後は振り返りを行い、支援方法の検討を重ねている。	
50		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人が自分で管理している方が1名。買い物や食事の際にその都度ご本人から支払いをしてもらっている。他8名は家族よりお小遣いとして預かり管理しているが、所持や使えることに関して関心がないと思われる。		
51		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	日常的に本人からの希望は少ないが、希望時にはなるべく電話を入れるようにしている。年賀状は毎年本人から家族・知人に送っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	左記の様に努めている。	広い空間の中で、ソファや畳のスペース、コタツ等を設け、利用者が好みの場所を選択して過ごせるようにしている。繭玉など季節の飾りつけがなされ、生活感のある落ち着いた雰囲気空間となっている。日々の清掃、定期的なワックスがけなどで清潔が保持されている。しかし、トイレに少し臭いがこもっている状況があった。	職員は、トイレの臭いの対策として清掃に努め換気扇も回しているが、窓がなく、また、トイレの使用頻度も多いため臭いがこもりやすい状況がある。リビングの真横でもあることから改善に向けた検討を期待したい。職員以外の人の知恵も借りながら、多様な視点からの検討の機会を設けてはどうか。
53		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳に座れない方にも自由に過ごしてもらえるようにソファを置いている。ホール内のテーブルの配置は、職員がすぐに対応できるようにと、危険がないと共に孤立しないように工夫している。		
54	(20)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	左記の様に努めている。	馴染みの写真等、可能な範囲で本人にとって思い入れのある物を持ってきてもらうよう家族に協力を依頼し、居室の環境づくりを行っている。また、担当職員は、利用者が居室で気持ち良く過ごせるよう、本人と一緒に環境整備や清掃をしている。	
55		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	それぞれの身体機能に合うように居室を検討し、環境整備・援助をしながら、能力を活かすようにしている。		